（改訂本）コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人

掌編小説集

冬のひまわり

コロナ渦の、こんな冬にもひまわりは咲く

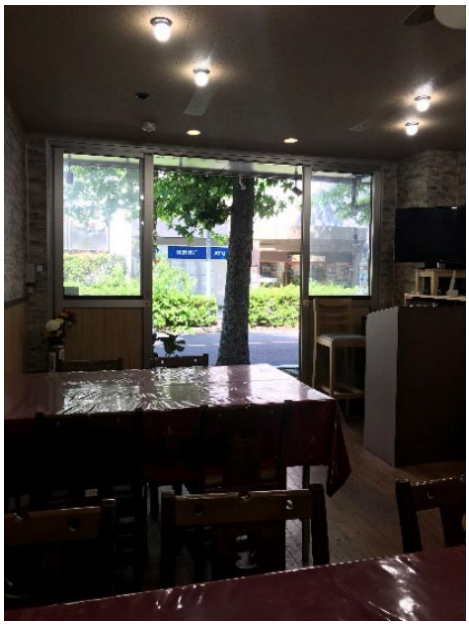
物書き
うときゅう いっき

（改訂本）コロナ渦カリー屋ナマステ別館堂主人掌編小説集

「冬のひまわり」

うときゅう いっき

「ナマステ別館」堂の主人



　ろくすっぽお客さんの来ない、カリーレストラン「ナマステ　エブリバディ」のお隣、ナマステ別館ですが、たまにお食事をするでもなく、ドリンクをお飲みになるでもないお客様が結構、ふらり、ふらりとお越しになります。

　団地再生機構のエージェントの方だったり、タウン誌の記者さんだったり、新聞屋さん、お弁当屋さんや退職された方々など、来られると大体小半時くらいは、よもやま話をしていかれます。

　今日は、目の前の通りに車を止めて道を聞いてこられた方が、折り返してきて立ち寄って行かれました。

　聞かれたのは近くにある「うさぎ専門店」の場所でした。
珍しいお店なので、飼っているウサギのトリミングにわざわざ高津区から来られたとか。

　で、その方がスマホの中にとってある「うさちゃん」の写真を見せるからと（ウサギはトリミングでお店に預けてあったので）スマホを取り出し、その写真を探し始めたまではよかったのですが、何を思われたのか、突然電話をし始め、きくともなく聞いているとなんと「借金の取り立て」だったのです。

　スマホを握っている手元を見ると約一本指がありません。
「えっ、なんやの？何話してはるの？えっ、こんな話聞いとって、ええのん？ヤバないの？」

　兎に角世の中にはいろんな方がいらっしゃいます。

　しかし、そうした方々に門戸を開放して、得になるのか損になるのかわかりもしない話を聞いて楽しむ。

　自分は本来、そういうことをしたかっただけなのかもしれないのかなぁ？と、ふと思いました。
　でなければ、ろくすっぽお客さんも来ない開店休業状態がもう１年半も続いていて、丸々大損もいいとこの、こんなお店を続けられるわけがありませんし。
多分自分は、この「ナマステ別館」堂の主人役が、大層、気に入っているのだろうなぁと思いました。

凧揚げの子（掌編　改変版）

１１年前、１２年間続いた心の病が底を打って以来、その後３年間、感情鈍麻の後遺症が残こっていて、頭の回転も今ひとつの状態でした。

そんなぼんやりした感覚に覆われていたので、底は打ったものの、どちらに向かって歩いて行けばいいのか分かりませんでした。

何かを見つけたい思いからか、以前から趣味だったカメラを持って、あちこち歩き回っていたのですが、３年前のその年のお正月に、最寄り駅から一本で行ける片瀬江ノ島海岸の東浜に海の風景を撮りに行きました。

行くと、思いもよらず、浜いっぱいに親子連れが拡がって、お正月の凧揚げ大会を遣っていたのです。

しばらくすると、お昼時になり、そこここで、家族がお弁当をひろげて食べ始めました。見ていると、その中に、独りでコンビニ袋から取り出した出来合いのお弁当を食べている小学校四、五年生くらいの女の子がいました。家族で来ているほかの子達は、みんなお母さんお手製のお弁当をおいしそうに食べている中で、なんとなくその子のことが遠目にも気になり、しばらく見るともなく見ていました。

すると、そこへ、同じ歳くらいの女の子がやってきて、その子を浜辺に引っ張り出すと、まずその子が、自分で凧をあげ、凧が風に乗ると、その凧糸を先ほどのひとりぽっちでコンビニ弁当を食べていた女の子に渡し、渡した子が元を押さえて、渡された子が舵を取りました。

凧はお正月の浜辺で、真っ青な空の中、面白いように泳ぎ、次第にぐんぐん上がっていきました。

それを見たコンビニ弁当の女の子の顔。

たこの高さと同じように、どんどん明るく晴れやかになっていったのです。

何もかも忘れて、何かずっと先を見ているような明るい笑顔。

嬉しくなりました。何か胸が詰まりました。そうして
「みんながこういう顔になるような仕事をこれからしていけたらいいかもしれない」
非常にぼんやりとではあったんですが、なんとなくそれまでとは何かが切り替わったような感じがしました。丁度「角を曲がった」とでも言うのでしょうか、気がつくと、既に景色が切り替わっていて、それまでのことが「過去に属している」ように思えたのです。
今の時点から語ると、そういう表現になりますが、その時はまだはっきりとした自覚はありませんでした。
ただ、周りの海や空や親子連れの姿が、まるで自分を覆っていた膜でもとれたかのように突然、自分の中にすーっと流れ込んできて、何か直接こころの肌に触れたような感触を得たのだけは覚えています。

大道芸の女の子

　クリスマスイブの夜。
フライドチキンやドーナッツの呼び込みの声の中、買い物やら、食事やら、家路に急ぐやらで、人々の流れが慌ただしい中、駅前のプロムナードの一角で、一人の女の子が大道芸を遣っていました。
　大学三年生で、今日が初めての芸の披露で、上手くいくか行かないか分からないけど一生懸命やりますから、見ていてくれるかな？とちらほら集まってきた数組の母子連れの子供達に声かけをしていました。
　風がやや強い中、小さなテーブルの上に大きな毬（まり）を乗せ、更にその上に板を乗せた状態でバランスをとりながらお手玉と一輪花を交互に投げては取り、投げては取りのぐるぐる回しをしました。
　女の子は何回か地面に落ちました。
「ごめん、もう一回やるからね」
と子供達に謝ります。
　そんなことを何回かしている内に子供達の間から「がんばれー、お姉ちゃん。がんばれー」の声援が起き、拍手が始まりました。
　きっと子供心にも、お姉ちゃんの頑張りが分かったのだと思います。
　そのうち、子供達は、そんなお姉ちゃんを見ているだけではなく、何か手伝えないかと思ったのかどうかは分かりませんが、芸に使っているお手玉や花を手元がくるって落とすと、我がちに、それを拾いに行って、毬の上にいるお姉ちゃんに「はい、これ、落ちたよ」と渡

しに行ったりしたのです。
　しばらくして芸が終わりました。終わると同時に子供達からは
「お姉ちゃん、これからも頑張ってー」「お姉ちゃん、また来てやってねー」
の新たな声援が起きました。
　それを見ていたお母さん達が、我が子らに小銭を渡して、入れてきなさいと促しました。子供達はお金を握りしめて、お姉ちゃんの持っていたハットの中にそれを入れると、お姉ちゃんは子供達にハイタッチをして「ありがとね、ありがとね」
と何度も言いました。
　無論大学で大道芸なんか教えているわけがありません。ここからは僕の推測ですが、おそらくこの子は、将来大道芸で食べていこうとは思っていないでしょう。
　日頃は、大学ではその他大勢の中の一人。アルバイトの時でも、多分。ネットの中では見えない誰かにすぎない毎日。確かに目立たないことで、怪我もしない代わりに何も起こらない毎日。
　私、本当にこの世に生まれてきたのかしら？本当にこの世に存在しているのかしら？みんなの目にちゃんと留まって、ちゃんと見えているのかしら？
　それで、この子はそのことを確かめてみたくなった。ちゃんと生まれてて、ちゃんと存在していて、ちゃんとみんなの目に留まっていることを。
　たとえ、恥をかいても、少しくらい怪我をしてもいいから、それを確かめてみたくなった。その方法手段が大道芸だった。のではないかと。
　もちろんこれは僕の当て推量です。確信はありません。でも、そうだったら少し嬉しい気がします。
　なんか、クリスマスイブの日にとてもいいものを見た気がしました。
そうして、残り少ない自分だが、どうせこの世の恥はかき捨て、ひとつ何かやってみるかなと、そんな気持ちにもなれたので、お礼に子供達の後で、小銭とハイタッチをその子にして、スーパーのレジ袋を下げながら、いささか張りのある気分で家路につきました。

となりの二人

焼き場を囲む帯のようになったカウンターで、一人飲んでいると、後ろでがッちゃんと音がして、ガラスコップのかけらが、足下に転がってきたので、拾い上げてホール係のひとに、ハイ、これといって渡しました。
暫く経つと、隣のカップルの男の人の方が話しかけてきました。
「お話ししてもいいですか？」というので、「いいですよ」というと、
「なんで、コップのかけらを拾ったんですか？」と訊かれたので、「転がってきたからですけれど」というと、
「普通しませんよね。そんなこと。しかも年配の人は」というので、「そう言われても」と続けて言うと、更に「びっくりしたんですよ、そういう人が居るんだって」と言われて返答に困ってしましました。
先ほどからすこーし気にはなっていました。女の人は 40 歳代に見えました。隣の男の人は、せいぜい 30 歳代前半。ちょっと男の人が、カモられているのかな？と思っていたんです。ちょっぴり危ない関係。だのに、質問の内容があまり危なくない。ちょっとギャップを感じました。
失礼だとは思ったんですが、「どういうご関係ですか？」と訊くと、「結婚して 1 年目の夫婦です。今日は結婚記念日で、ここに飲みに来ました」との答え。ますます意外になりました。
その後、問わず語りにその夫婦が話したところによると、
若い方の旦那さんが、１２歳も年上で、しかも中学生の女の子のいる奥さんに一目惚れ。本人曰く、「もう好きで好きで、どうしようもないくらい好きで、子供が居るなんて言うことは、眼中になかったんです」と。
するとかなり年上の奥さんが「一体私なんかのどこがいいんだか・・・前の旦那さんに子供と一緒に捨てられてオタオタしてただけの人間なのに。最初だまされているんだと思いましたよ。そんなことありっこないって」
今度は旦那さんが、「信じてもらえなくて、何度も何度も、通って頭下げて。娘もなついて

くれて。僕の味方になってくれて。おかさん大丈夫よって言ってくれたみたいで、やっと OK がもらえたんですよ。結婚するって。いいわよって。泣きました。うれし泣き。男泣きで、わんわん子供みたいに泣いちゃいました」
いま、この夫婦の部屋には、そのお子さんのお母さん方が時々遊びに来るらしいんですが、旦那さんは板前家業が非番の時には、奥さんのお友達であるお客さんのために、腕を振るって立派な料理を出してあげるそうです。もちろん娘さんやそのお友達も一緒にお相伴に預かるそうです。そんな大人数のお客さんに、しかも毎回。心を込めて。
「だって、コイツの友達は、僕の友達でもあるんです。ありたいんです。全然苦になりません。楽しくって仕方ないですよ。」
「私も時々泣きたくなるんです。こんなに幸せでいいのかなって。ひょっとして朝起きて、この人がいなくなってたらどうしようって思ったことも何回かありました。夢が覚めるときがあるんじゃないかって。でも、最近はもうそんなこと思いませんよ。このひとに失礼ですからね」
旦那さんは、お客さんが来ると、窓を開け放つそうです。外の新鮮な空気が中に入って、代わりに部屋の汚れた空気が外に出て、いい気分になれるからとか。ちょっと寒くても。
「窓をあければいい空気と同時に、ひょっとしたら、鉄砲玉も飛び込んでくるかもしれませんが、仮にそういう危険があったとしても、窓を開けない限り、新しい空気は入ってきませんものね」とおっしゃいました。
聞いているうちに、話すときだけでなく、僕の頭の中の言葉も、それまで使っていた平常文が尊敬文に変わっていました。ひとは、年齢でも見た目でもないんだ。
これは、8 年前のはなしです。苦しい思いをしていたときで、図らずも偶然、隣り合わせに座っただけのこのご夫婦に、さて、もう一回やってみるか、という気持ちにさせていただいたので、感謝を込めて記させていただきました。
（写真はイメージです。本人ではありません）

我が青春のアンケ・ヴァレンチク 前作加筆版

若い頃、ロシアに語学短期留学に行った折、我々短期留学の男子の間で、評判の女の子がいました。名前も分からず、どこの国から来たのかも分かりませんでしたが、小柄、金髪、黒い瞳のとてもかわいらしい娘（こ）です。
「あんな娘（こ）と話してみたいな。何語で話せばいいんだろう」などと言う話をしていましたが、その娘のそばにはいつも、古城の門番みたいなでっかい女の友達がついていて、虫払いをしているようでなかなかきっかけが見つかりませんでした。
ところが、ある日、与えられた自室のベッドの上でごろりとなっていると、扉をノックする音がしたので、「いいよ、入れよ」と横になったまま、言いました。同じ短期留学のクラスメートだと思ったのです。
ところが、入ってくる様子がないので、仕方なく起き上がって扉を開けると。
立っていたんです、その娘さんが。ただし、その後ろにおばあさんも立っていました。
無論とっさに言葉が出ません。第一何語を使えばいいのかも分かりません。当時ロシアではあまり英語が話されていなかったのです。
で、その娘さんが話し出したのは、英語でした。
「わたしは、アンケ。アンケ・ヴァレンチクです。西ドイツから来ました。後ろに居るのは私のおばあさんです。私一人で来るのを心配してついてきました。」
と、そこまでは覚えているんですが、一体この、かわいらしいドイツ娘が、僕の部屋に何しに来たのか？
おそらくは訊いたんだと思いますし、答えも聞いたはずなんですが、何故か今になって何も

思い出せないのです。洗濯物が落ちていたんで届けに来ましたでもないし、日本語を教わりに来ましたでもない。無論おつきあいしてくださいでは絶対なかったような気がしますが、ならばなんのよう出来たのか？思い出せないのです。
暫くして、アンケとおばあさんは扉を閉めて、多分どこかへ行ったんだと思います。でも、その後の記憶も定かではありません。
今、手元に、そのアンケと門番みたいな大柄な女友達と、当時の僕のクラスメートの男子が映っている写真が残っています。多分これは、通っていた外国人向けロシア語学校の入り口の階段そばだと思うのですが、クラスメートと門番女子はどこか、遠くを見ている目つきなのですが、アンケだけは僕が向けたカメラのレンズをじっと見つめている写真です。ですが、やはり、どうしてこういう写真を撮れるシテュエーションが成り立ったのか？それすらもよく思い出せません。
今見ると、アンケは、少しほほえんでは居るんですが、少し切ないような目をしているようにも見えます。
一体あのとき、あの短い時間で何があったのか？
で、暫く、というか、かなり真剣に当時のことを思い出してみると、なんでアンケが僕の部屋に来たのかを思い出すことが出来ました。
「明日、西ドイツに帰ります。楽しい時間をありがとうございました。ダンケシェーン」
それを言いに来たのでした。
アンケもその後、無事に生きていれば既に齢（よわい）６０過ぎです。いったいどんな人生を歩まれて、どんな老婦人になっていらっしゃるのか？出来ればお会いしてお話が出来たら、とても嬉しいことなのにと思っております。

Final mission「最期の任務」

これはとても感傷的なお話です。
しかし、百年に一度の疫病禍の時節には、そうなるのも仕方ない気も致します。
以前、お店に向かう途中、1メートル進むのに1分以上もかかる老犬を連れた、体格がよく顔には品格を感じるご老人とよくすれ違い、挨拶をするようになりました。
「旦那さん、いつも大変ですね」
「いやいや、自分よりこいつの方が」
そんな会話です。
しかし、ここ2か月ほど、その姿を見かけなくなりました。
こちらもいろいろありましたので「そういえば、なんとなく見ないな」くらいで済ませていました。ほとんど忘れていたと言ってもいいでしょう。
それが、今日突然、
「わんこは連れていないが、あのご老人かな？」
という人とすれ違ったので、他の人同様ウィルスを防ぐためのマスクをしていたせいもあって「間違いかもしれないな」とは思いつつ、声を掛けました。
「いつも、わんこを連れていらっしゃる方ではありませんか？」
するとそのご老人は、足を止めてマスクを外しながら
「はい。そうです」
とおっしゃったので
「わんちゃんは、今日はいないんですか？」
と尋ねると
「亡くなりました。1月に」
とにこやかながら寂しそうな顔でおっしゃいました。
「そうですか。かわいそうに。旦那さんは元気でいてくださいね。お力をお落としでしょうけど」
ご老人は薄い笑いを浮かべました。
「ありがとう」

しかしそのマスクを外した顔は、下半分が白い無精ひげで覆われていて、その力の落としようがはっきり表れていました。いつもはきちんと髭を剃っておられたからです。
自分は、実はすれ違うたびに、あのわんことの散歩がこのご老人の生きがいだったような気がしていました。というより最後の任務。Last mission。
「わしがいなくなれば、誰がこいつを散歩させるんだ」
その任務は終わってしまいました。
わんこより元気なご老人にとって、あの 1 メートルを歩くのに 1 分もかかるわんこは、反対にご老人の「心のステッキ」だったのかもしれないな、と思いました。
会話をした後、次第にお互いの距離が遠ざかるにしたがって、何故か、悲しくて、悲しくて仕方なくなりました。
それぞれの行き先が反対方向だったので、お互いの、その後の顔を見ずに済んだのは、幾分なりとも、幸いだったような気がいたします。

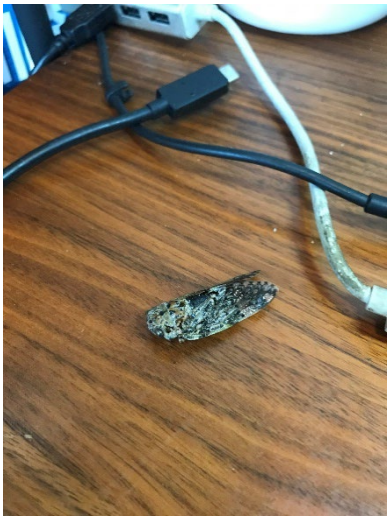
（完）

さくらの置き土産

　今からもう１３年前のことです。
当時自分はうつ病からの病み上がりで、殆ど感情というものをなくしておりました。
　奥さんと別れ、一人暮らしを始めて一年程立った１２月の２４日、さくらは奇妙なクリスマスプレゼントとして、元の奥さんの家からわが家にやってきました。
　お金はかかるし、面倒を見るのも大変だし、余裕のある旦那さんに見てもらうのが筋よと友達に言われた奥さんは、自分に相談してきました。
いい加減言い争いには懲り懲りしていましたので、押しつけあいをするのも疎ましく、黙って引き受けることにしたのです。
　しかし、その当時、さくらは既に癌にかかっておりました。そのことは知っていました。
　さくらは、来た当初、本当に癌なの？と言うくらい元気で、会社に行く前の朝４時、丘陵地帯のかなり寒い空気の中の散歩も嬉々として楽しんでいました。人懐こいわんこで、通りを一緒に散歩していると、向うから人がやってくると、誰彼かまわず、路上にコロンと仰向きになって、お腹を見せ、掻いてよ、とばかりに無防備全開！宅配便のお兄さんが来れば、全く初対面なのに、とびかかってじゃれつく始末。本当に人懐こいわんこでした。
　しかし、４月になると、さくらは、急速に弱っていきました。
　散歩のスピードがおそくなりました。癌細胞が増殖しているらしくお腹が膨らんできました。そうして、ついには、玄関の上がり框（かまち）も一人で上がることが出来なくなったのです。
　さくらは、動けなくなってしまいました。息が荒くなり、昼と言わず夜と言わず、苦しそうに息をしています。こちらも、そんな息を聞くと、夜も眠れず、ほとんど一晩中、さくらのお腹をさすってやる日が何日も続きました。辛いとも苦しいとも、一言も言わないさくら。その無言さが、痛みを訴える言葉よりも何層倍にもなってこころに突き刺さりました。会社

に行っていても気が気ではありません。
　そうして６月２４日の深夜、いつもは僕の書机の脚元で苦しい息をしながらうずくまっているのですが、突然よろよろと、這うように歩きだして、扉の方に向かったとおもったら、僕のほうを振り向き、諦めたような悲しそうな眼をして
「おとうさん、お世話になりました。楽しかった。でも、今日でお別れです。さようなら」
と言ったのです。はっきりと。
　僕は慌てて、さくらを抱きしめ、タクシー会社に電話をして、かかりつけの動物病院に駆け込みました。
さくらは、早速酸素テントにいれられて、口には呼吸を助けるためのチューブが入れられました。
「しばらく様子を見ますから、一旦お帰りください」
と獣医さんに言われて、家に戻ってすぐ
「容体が変わりました」
と電話があり、返す踵（きびす）で病院に向かいました。
「もう、手がありません」
獣医さんはおっしゃいました。自分は、先生の言う前に
「安楽死させてやってください」
とお願いしました。
　呼吸用のチューブが抜かれると、自力呼吸がもはやできなくなっているさくらは、間もなくこの世を去りました。
　途端、それまでの感情を亡くしていた自分とは全くの別人に成り代わり、まるで堰を切ったかのように人目もはばからず大声をあげて泣き崩れました。
　悲しくて、悲しくて、いとおしくて、かわいそうで。
　家に連れて帰って、小さな棺に入れられたさくらの亡骸に目をやりました。
　そうして、おもったのです。
　さくらは、じぶんのいのちと引き換えにうつ病で感情をなくしていた自分に、感情を、ひとのこころを置いていった。
　１２月２４日に来てから、丁度きっかり半年目の事でした。
　それ以来自分は、身体がどんなに傷だらけになっても、人生がどんなにつぎはぎだらけであっても、そして、それらを取り換えることも消すこともできなくても、捨てるのだけは止めにしようと思うようになったのです。
だって、さくらが命と引き換えに置いていってくれた「大切な置き土産」なのですから。

蝉（せみ）



今朝、自分の部屋の掃き掃除をしました。
掃き集めたごみの中に小さなニイニイゼミの亡骸（なきがら）がありました。
昨日の朝はなかったので、恐らくそれ以降、自分の部屋の中に迷い込んで出られなくなり、息、絶えたのでしょう。
それを見て、自分はとても悲しくなりました。
今の自分にたとえたのです。
蝉は、外界にでるまで、7 年から 13 年土の中で過ごします。そののち、やっとのことで外界にでても、生きられるのは、せいぜい 1 週間から 2 週間。
そのわずかな期間も、自分の部屋で起こったような事故にあえば、さらに短くなる。
それを思うと、セミが哀れでした。
それを、今の自分に重ねました。
しかし、それではいけないと、
「そんな身の上ではあっても、少なくとも子孫を二人残したではないか。その子孫の内の一人がまたその先の子孫を二人、のこしている。自分の役目はそれで充分」
そう自分に言い聞かせようとして、更に物悲しくなりました。
そこまで遡って自分を納得させなければいけないほど、弱り切っている今の自分が、悲しくて、悲しくて、なりませんでした。
その後、自分はしばらく床の上で天井を見ていました。
そして、
「自分はその「感傷」にまみれたくない」
そう思いなおして起き上がると、その「空蝉（うつせみ)」をごみの中から拾い上げて「埃

（ほこり）」を払い、それ以上まみれないよう戒め（いましめ）と供養を兼ねて机の上に置きました。

蚊蜻蛉（かとんぼ）

　家の中で寝っ転がって何気なく天井に目をやっていると、どこからか蚊蜻蛉（かとんぼ）がやってきて、見ているその天井に留まりました。
　名前の「蚊」が示すように、手足がとても細長くていかにも「か細く、華奢」にみえました。
　そういえば子供の頃、親父が
「蚊蜻蛉は天からの遣いやで。昔な、罪人として焚刑（ひあぶりの刑）にされそうになった若い男のところに、蚊蜻蛉が飛んできたんやが、その若い男はこういったん、そうな
「こんなところにおったらお前も焼け焦げになる。はよ、あっちへいね」ってな。ところがそれを聞いていた判官さんが、その焚刑を止めて、若い男を放してやったそうなんや。なんでや、言うたら、な
「そんな気持ちの優しい男に悪事ができるはずがない。放してやり」
ってな」
　それ以来、自分は「虫も殺せぬ」男になりました。
　今でも、自分はいろんな虫を見るたびに、いろんな感情が湧いてくることがよくあります。
多分それは、この、親父の話のせいでしょう。

黒糸とんぼ

真っ黒な糸とんぼが、気象異常に見舞われた長雨続きの七月のある日、かなり激しい雨の中を一匹、飛んでいました。
とんぼからみた雨滴の大きさ、強さを人間である自分に置き換えてみると、ハンドボールのゴールシュートが雨あられと降る中を飛んでいるようなものだろうと推察できました。
それでも、黒い糸とんぼは何事も起きていないかのように易々と飛んでいました。
それを見て昔読んだ本の中の一節を思い出しました。
「韃靼海峡をてふてふ（蝶々）が一匹渡っていく」
何とも言えず、胸が熱い思いに満たされました。

カナカナゼミ

　コロナ禍、梅雨明け初日の朝、自転車でお店に向かうため、森林公園を抜けようとすると、突然、森の奥の方でカナカナゼミが鳴き出しました。
「かなかなかなぁ」
　カナカナゼミは別名「日暮し」と言って、夏の日が落ちるころに鳴く蝉です。
　その鳴き声を聞いていると、日が陰って薄暗くなり、少しずつひんやりしてくるせいもあって「お祭りが終わった後」のようになんとなく物悲しい気分になるのですが、それをこれからお店が始まる「気分の上り坂」にしなくてはならない朝から聞くとは思ってもいなかったので、少し憂鬱な気分になりました。
「なんで、選りによってやっと梅雨が明けた日の、しかも朝から、鳴いているんだ、縁起でもない」
　そう思うと少し腹立たしくなってきたのですが、更にその「かなかなかなぁ」という鳴き声を否応なしに耳にしていると
「ほんと、かな？ほんと、かな？本当にそれでいいの、かな？かなかなかなぁ？」
と言っているような気がしてきました。
「あんた方、なんで私たちがこんな時間に鳴くようになってしまったのか、少しは考えてみたらどうですか？」
そういって、何かの気づきを促しているような気も致しました

未来からの暗示

　子供の頃のことです。
夏休み、遊び疲れて帰ってきて、いつの間にか、八畳の間で寝入ってしまったようです。あるいは、お昼寝でもしよう、と思ったのかもしれません。
　目が覚めると夕暮れ時でした。日が落ちかけていて、部屋の中は少し薄暗く、かなかな（＝日暮し蝉）が鳴いている以外は、物音ひとつせずにひんやりと静まりかえっていました。母は夕飯の総菜を求めて買い物にでも出かけたのか、おりませんでした。弟や妹たちも、まだ外で遊んでいるのかやはりおりませんし、ばあさんもいつも座っている茶の間にもおりませんでした。
　その時、何故かふと、言いしれぬもの悲しさに襲われました。
　その頃は、まだ宇宙というような抽象的な言葉は知らなかったと思いますが、その言葉を大人になって使うことが許されるなら、本当に「宇宙にただ独り」のような感じがしたのです。
　この先、どこまで行っても、誰にも会えない。誰とも繋がれない。何か知らぬ間に、みんなとの糸が切れて、独り置いてきぼりにされたような、なんとも言えないもの悲しさ、さびしさ、おそろしさ。
　僕は急に心細くなって
「ねぇ、みんなどこ？どこにいるの？だれもいないの？」
と、大きな声を出しました。しかし返事はどこからも返ってきませんでした。
　あれはなんだったのか？何故そうまで、はっきりと覚えているのか？
　そして最近、思い当たりました。
　あれは、その後の自分の人生に対するぼんやりとした「未来からの暗示」だったのかもしれない、なと。

ひとがそうするのか、自分がそうさせてしまうのか、それはわかりませんが、うっすらとではあっても、影のようにつかず離れず付きまとう予感というものは「虫の知らせ」同様、抱いた段階で、ほぼ確定と言えるほど、相当な確率で実現するもののようです。

ケロヨンの指人形（修正版）

　しんのすけ君はおとうさんの大きな手につかまってホームで電車を待っていました。すると、ホームの後方にあるベンチ方から声が掛かって
「旦那さん、可愛い坊ちゃんだね。坊ちゃんにこれあげてもいいかい？」
とその声は言い、振り向くとひげ面で頭にタオルの鉢巻きをして、泥だらけの汚い服を着たおじさんがベンチに腰掛けたまま、ケロヨンの人形を、人差し指に挿した姿で見せました。
　それから、暫く間があった後で、しんのすけ君のかなり上の方でおとうさんの声がして
「ありがとうございます。戴いてもいいんですか？」
と聞こえた後、その汚い格好をしたおじさんが、しんのすけ君に目を向けて、ケロヨンの指人形を差し出してきました。
「坊ちゃん、これやるよ。拾ったヤツで汚いけど」
　しんのすけ君はそう言われて、思わず後ずさりをしておとうさんの後ろに隠れてしましました。
　本当は、ケロヨンの指人形は大好きで、とても欲しかったのですが、それ以上に何となく怖かったのです、汚い格好をして、昼間なのに目がとろんとしたおじさんが。それに、日頃おかあさんからは、知らないひとに声をかけられても返事をしちゃダメよ！ついていってもダメよ！すぐ逃げなさい！と言われてもいましたし。
　それで、おとうさんの後ろでもぞもぞしていると、おとうさんがまた上の方から
「しんのすけ、人様にものを戴いた時は、なんて言うんだ？ん？ちゃんとありがとうといいなさい」
　しんのすけ君は、混乱してしましました。おかあさんはダメだと言っていた。おとうさんは、ありがとうと言いなさいといっている。そして、自分は、何となくこのおじさんが怖い。でもケロヨンは欲しい。
　それやこれや、あれこれ思っていると、またまた上の方からおとうさんの声がして

「済みません。しつけが行き届かなくて。息子に替わってお礼を申し上げます。恥ずかしがっているだけで、とても喜んでいると思いますよ。ありがとうございました」
　その後、程なくして電車がホームに入ってきて、しんのすけ君はお父さんと一緒に電車に乗り込みました。
　汚い格好をしたおじさんは、電車には乗ってきませんでした。それを見て、しんのすけ君少しホッとしました。その後一緒に乗ってきて、話しかけられてもなんと返事をしていいのか分らなかったからです。
　おとうさんの用事が済んで、家に帰ってきたしんのすけ君は、いつもお母さんから言われているように、まず洗面所で手うがいをしたのですが、その時、泥で汚れたケロヨンの指人形をポケットの中から取りだして、ケロヨンも一緒に洗ってあげました。
　そして、その人形を持って自分の勉強机の上に置きました。
　しんのすけ君は椅子に座ってケロヨンの指人形を眺めながら、先ほどのことを思い返していました。
　お父さんとお母さんの言っていることが違う。それに怖いのと欲しいのと。こんな風に違うのがいっぺんにやってきたときには、どうすればいいんだろう？
　しんのすけ君は自分なりに、そこまでは問題を今一度まとめ直してみたのですが、答えは見つかりませんでした。
　もし、また同じようなことが起きたら？その時また、今日みたいに、おとうさんの後ろに隠れたまま、お父さんがおじさんとの話を早く終わらないかと、ただ待っているばかりでいるのは、とても嫌な気がしました。それで、なんとか答えを見つけようと頑張ってみたのですが、やはり答えは見つかりませんでした。
　しんのすけ君は、やや癇癪持ちの子供でした。ですが、癇癪を起こすと周りに当たるのではなく、何故か自分の手を噛んだり、自分の頭をゴンゴン叩いたり、自分で自分をいじめる変な癖がありました。
　それで、答えの見つからないしんのすけ君は、イライラして自分の二の腕にがぶりと噛みつきました。口を離すと、二の腕に歯形がくっきりとついていました。うっすらと血もにじんでいます。
それでも、答えが見つからないしんのすけ君は、机に突っ伏したのですが、疲れていたせいもあって、そのまま寝入ってしまいました。

蛾

「蝶（ちょう）」と「蛾（が）」
字面と発音からして「蛾」は何となく怖い感じです。
蝶々は飛んでいるのをよく見かけますが、蛾が飛んでいるのを見た事は一度もありません。
なので、蛾が飛んでいる処を見かけたら結構「ドッキン」とするかもしれません。
「見たなぁ、俺が飛んでいるのを。消えてもらうしかないな」
そんなことを耳元で囁かれそうな気がするからです。
そうして何より「怖さ」が感じられるのは、歌舞伎の青隈を描いたような、メリハリの在り過ぎるどぎつい羽根の文様です。
蝶々は羽を立てて休みますが、蛾は羽を広げて休むので、あたかも「この毒々しい文様をとくと見ろ」とでも言っているかのようです。
　その奸計の通りに引っかかって、自分は蛾を見るたびに、一瞬「ぞっ」として鳥肌が「もぞもぞ」と泡立ちます。
しかしその蛾ですが、蝶々は花から花へひらひらと舞って、その蜜を吸っているようなのですが、よく見かける蛾は、例えば玄関脇のモルタル塀に羽を広げてへばりついているばかりで、ピクリともしませんし、そんなものに一晩中へばりついていても、モルタル塀からは蜜も水分も口にすることが出来そうもないのに、なんで一晩中へばりついているのか、という不思議な側面も持ち合わせております。
「おまえなぁ、いったい何を考えとぅねん？あん？何が楽しぃんや？何しにこの世に生まれてきたんや？言いたいこと、あんねぇやったら、はよ、言うてみぃ」
　それにしても、相手方の無言、無表情、無反応は本当に困ります。なので「当たり」を求めてついつい色んなことを矢継ぎ早に訊きたくなってしまいます。
それにしても何故、そんな蛾の事が、気が付くとしばしば頭の片隅に浮かび上がってくるのか、自分でもよく分かりませんが、妙に気にかかって仕方がない事だけは確かです。
蝶々の事は思い出しもしないのに、不思議です。何かが自分のアンテナに引っ掛かっているのでしょうか。
　兎に角、何度も出てくるので、気になって仕方がありません。出てくるたびに文様が怖いので、憂鬱にもなります。
　何かのシグナルであるならば、時を待たずに「暗号解読」に漕ぎ着けて、奥歯に残滓が挟まったままの様な鬱陶しさをできるだけ早く、取り除きたい思いに駆られております。
　そんな折、不図
「天はこちらが望むような形で解をお示しにならぬ場合がある。敢えて形を変えて解をお示しになり、それに気づくかどうかお試しになる場合が時折ある」

大昔に読んだ本の一節を思い出し、形を変えた暗号を見落とすのも何だしなと、今少し前向きに観察を続けることに致しました。

正直に申し上げれば「自分はここまで気づく人間なのだぞ」と単に人々に誇りたいだけなのか、それとも真摯な気持ちからこうした取り組みをしようとしているのか、定かではなく、むしろ疑わしい部分もございます。また、先に記された「時折ある」の発生確率がどれほどの頻度で発生するのかも知る由も術もありません。

そういった点からすれば、曖昧模糊とした不明瞭さばかりが目立つのですが、従来の手垢にまみれた「人間様の尤もらしい言説」にはいい加減うんざりしてもいるので、今般の危機に際し、新しい切り口を見出そうと、ここは敢えて全く手つかずの「辺境の地における八卦占い」のような方法をとってみようかなと思った次第でございます。

正に「当たるも八卦、当たらぬも八卦」の五分五分勝負。「勝った、負けた」は時の運。天が勝つか我（が）が勝つか？その勝負すらもお預け申す。

そんな都々逸のような語呂合わせを口の中でロずさんでいるうちに、だんだんその気になって参りました。

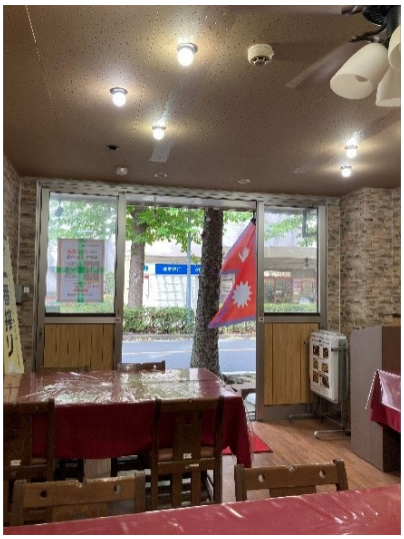
「鶴は千年、亀は万年。人は百年、蛾は一年。長短あれども今生一回。ならば後悔すべからず、あとは儘（まま）よ、と清水の、高舞台より荒波に、捨て石覚悟で飛び込まん」

（完）

（追記）

オマケの小説には必ず写真を載せておりましたが、今回は「蛾」の絵柄が怖いので割愛させていただきます。悪しからず。

涙のネパール国旗（改訂版）



　台風や強風、雨風（あめかぜ）に晒され、二年半の間にお店の前の、カリー屋の御徴（おしるし）であるネパール国旗がほつれて、ボロボロになってしまいました。
定休日の早朝、一人で前日の売上整理をしながらそれを見ていたら、なぜか涙が出てきました。
　道半ばで倒れるかもしれないと思うと、涙が止まらなくなりました。
「爺さんだって、泣くこと、あるんだもぉ〜、ん」
誰もいないのに、自分に向かって、そうおどけて見せるのが、その時自分ができる精いっぱいの矜持でした。
「泣くことだって、あるんやでぇ。分かった？分かってぃんの？」
後でそう付け加えたのは、誰かに聞いてほしかったからでした。
ボロボロのネパール国旗が、突然吹き出だした風に引っ張られてパタパタパッパと音を立て、その半濁音が自分には「アハハのハツハ」と笑っているように聞こえました。
「笑わんといて、マジなんやから」
ふざけるしかありませんでした。

青虫（加筆版）

けん太君の叔父さんは、交通事故で目の中に入れても痛くないほどかわいがっていた末っ子の庄ちゃんを亡くしていました。それは自分が商売をしているお店の真ん前で起こったのです。

お店の真ん前で起きたことに、叔父さんは「商売にかまけて、どうして見ていてやれなかったんだ」と自分自身を責めさいなみました。

そうして叔父さんは自暴自棄になって、酒浸りになっては荒れ狂い、それが過ぎると今度は青菜に塩のごとくに意気消沈して、ふぬけのような状態になってしまったのです。

そのように叔父さんは、一時、家族の者も手のつけられない状態でしたが、たまたま近くに住んでおられるお坊さまのお話をお聞きしてからというもの、なにやら大いに感ずるところがあったようで、その後再び、あれほど「信ちゃんの命を奪うきっかけになった」と忌み嫌っていたお店の商売に励むようになりました。

その叔父さんが、けん太君に常々言っていたのは

「庄五の命もけん太の命も叔父さんにとっては同じように大切なんだ。我が子、ひとの子の差はないんだ。生き物の命もみんな同じなんだぞ。人間の命が大切で、虫けらの命が粗末だということはないんだよ。だから、決して無益な殺生（せっしょう）をしてはいけないよ。蚊でも蟻でも成る丈、踏みつぶしたりしないようにしなよね」

ということでした。

けん太君には「せっしょう」という言葉の意味は分かりませんでしたが、恐らく踏みつぶすことなのだろうとけん太君なりに解き下しました。
そんなある日、けん太君が独り団地の公園のお砂場で砂遊びをしていた時、荷台の配達かごに野菜を積んだ八百屋さんの実用自転車がそばに留まりました。御用聞きのお兄さんが、公衆便所にでも行くのか、とめていったのです。
その自転車をけん太君は見るともなく見ていると、ちいさな青虫が一匹、止めた自転車の後輪のスタンドを伝ってスポークの部分からタイヤの部分に移ろうとしているのが目に入りました。
瞬間、けん太君は、あのお兄さんが戻ってきて自転車をこぎ出したら、青虫は死んじゃう！と思いました。
しかし、けん太君は青虫に限らず、毛虫が大嫌いでした。見ただけで寒気がしてくるのです。
ですが、このままだと青虫はぺちゃんこになってしまうか、細切れになってしまう。
「どうしよう？」
実は、けん太君の耳には、青虫を見た瞬間から叔父さんのしてくれた話が聞こえていたのです。
気持ち悪くてしかたない。でも、見たのに見てないふりをしたら？知っているのに、知らん顔したら？
けん太君は手のひらの内側が汗だらけになるのを感じました。心臓もどっくん、どっくんなっています。息が詰まりそうになりました。
すると、その時、わーっと言う大声と共にけん太君は、一気に、青虫を親指と人差し指でつまみ上げるやいなや、思いっきり遠くに放り投げたのです。
けん太君は、その後まるで、５０メートルダッシュを１０本遣った後みたいに、はあはあと肩で息をすると、その場にへたり込んでしましました。
手の中には、ぷよぷよの青虫の身体の感触が残っていました。
けん太君は、その感触を思い出すと、体中に鳥肌が立つのを感じ、その記憶をふりはらおうと、思わず頭を激しく振って
「あわわわわっ」
と、叫んでしまいました。
その後、夕日を背に、けん太君は家に帰りました。しかし、けん太君はその日の出来事を家の人には話しませんでした。
夕飯の後、けん太君はひとりでお風呂に入っているとき、さっきのことを何度となく思い出しましたが、起こったことやしたことが今ひとつ自分でもよくわかりませんでした。
しかしその夜、けん太君は、お風呂から上がってから、何かとても言いしれぬ安堵感を覚えて、吸い込まれるように眠りに落ちました。

　翌朝、けん太君は目をさますと、起こしに来たお母さんが
「けん太、おまえ夕べ盛んに、やったぁ、できたぁ、って何回も寝言言っていたけれど、一体何が出来たんだい？」
とけん太君に尋ねました。
　けん太君は、お母さんの質問を聞いて、自分がそんな寝言を言ったことが、少し恥ずかしく思えたので、
「どんな夢かなんて、覚えてっこないよ」
と、ごまかしてしまいました。
　しかし、お母さんが、台所に朝ご飯の支度をしに子供部屋を出た後、けん太君は、ちょっとにんまりしました。
　それというのも、それまで絶対にダメだと思って逃げてばかりいた大の嫌いな毛虫をつかむ勇気を持てたできたことが、溜まらなく嬉しかったからでした。誰かに褒められたりはしなかったけれど、得意なことをしてお父さんやお母さん、学校の先生に褒められたときよりも、ずっとずっと嬉しかったのです。
　その後、小学校の高学年になったけん太君は「苦手の克服」という言葉を知りました。
　しかし、あのときのことを思い出すと、あれは苦手の克服なんて言うもんじゃなくて、とっさに「決死隊員」にならなきゃ、とおもっちゃったからだったのかもしれないなぁ、
と、何故か立派すぎるように感じられたその言葉を、こっそり心の中で書き直しました。

黒い予兆

朝、前日が日曜日だというのに、コロナ渦と気候変動由来とおぼしき突然の強大寒波で激減してしまった「悲しき売上」の整理を終え、自転車でお店から帰宅する途中、どこにいるかは分らなかったのですが、一羽のカラスが、やたらと大きな声で「カァーカァー」鳴くので、何事だろうと思いながら自転車を先に進めました。

朝日を浴び、反射で白っぽく光る道の真ん中に何か黒っぽい物が置いてあるのが見えました。

何だろうと、目をこらしながら自転車の速度を落としてその脇まで行ってみると、カラスでした。

お腹を天に向け、体の真ん中で両脚が縮こまっていました。

死骸でした。

そうだと分った瞬間、一瞬ドキッとしました。

カァーカァー大声で鳴いていたのは、それを悲しんでのことで、恐らく番い（つがい）だったのでしょう。

犬が死んだのを見たことはあります。飼っていた愛犬が亡くなったときに。

猫もあります。道路で車にひかれて「ぺしゃんこ」になったのを。

雀もありました。子供の頃、空から子雀が落ちてきたのを拾って、弟と二人で看病したのですが、翌朝には目が灰色になって死んでしまったのを。

しかしカラスは「生まれて初めて」でした。

獰猛且つ狡猾なカラス。

無意識にも「不死」だと思っていた、そのカラスが死んでいる。

しかも、密かに隠れることなく、生き物の死に方の作法に反し、おおっぴらに「人間の眼前」で。

そういったつかの間の慌ただしい比較対照算段がよぎった後、ある言葉が脳裏をよぎりました。
「異変」
尋常ただならぬ事態、の到来。
自転車の進行方向、照り輝く朝日の中にカラスの「真っ黒」
その残像が蘇ると、
未来に対して何か言いようのない不吉さを感じ、自転車を漕ぎながら、沖合彼方で急速に立ち上がり、あっという間に何もかも飲み込んでしまう津波のような「不安」に、気分ごと押し流されてしまい、しばらく自転車を漕ぐ先の景色が目に入っていませんでした。
それが、危ない運転だと気づいたのは、家にたどり着いてから後のことでした。

冬のひまわり

　夏のある日、お店に向かうのに公園墓地を抜けていくのですが、その公園に入る手前、左手遠方の工事に使う重機置き場の銀色のスティール塀の前に一瞬ですが何か黄色い帯のような物が目に入った気がして
「んっ、何？」
そして
「歳で黄斑変遷症が更に進んだか」
と憂鬱になりかけました。
　しかし毎日自転車ばかり漕いでおりますと、年の割には存外動体視力が上がっていることにも気づいておりましたので、
「気のせいではないかもしれない」
と、これまた瞬時に思い直して、自転車を止め、彼方に目をやると、間違いなく鮮やかな黄色に染まった広がりが見えました。
「こんな処にそんなものあったっけ？」
と、自転車を左の道に切って近づいて見ると、それは辺り一面のひまわり畑でした。
自分には知識がないのでよく分りませんでしたが、恐らく一夜にしてひまわり畑の花々が一気に開花したのでしょう。
「へぇー、スゴイ！！良い物見つけた！！」
　それからというもの、雨の日以外は少し寄り道をして、毎日ひまわり畑の様子を見ながらお店に向かいました。
　お店の休日には、何時までにお店に行って事務処理を終えなくてはならない、という縛り

もなかったので、自転車を降りて、気ままに写真を何枚か撮ったりもしました。いろんな角度や思いついたいろんなテーマに沿って。
　ところが夏も終わりかけたある日、あまり立ち枯れのひまわりが目立つわけでもなかったのに、ひまわり畑の脇を通ろうとすると、これまた一夜にして全部のひまわりが消えておりました。
「えっ、何？なんで？」
理由は分りませんが、恐らくこの土地の持ち主さんが一晩で全部のひまわりを刈り取ったとしか考えられませんでした。
　一体、あれだけの本数を咲かせて、これまたあれだけの本数を刈り取った。
何のために？
　そう言えば、時たま車で乗り付けてしばらく眺めていく人たちも何組かはおりましたが、その数は少なく、とてもその人数や訪問回数に合わせて植えられていたのだとも思えません。
　ところがそれから数日後、刈り取られたひまわりのない裸の畑に鳩や名前の分らない鳥たちが朝から集まり、多分ひまわりを刈り取ったときに落ちた種だと思うのですが、畑のあちこちで気ぜわしく地面をつつく姿が見受けられました。
「鳥のためのひまわり？ひまわりの種作りの畑？」
益々このひまわり畑が何のために「豪勢なプレゼントでもあるかのような、あの盛大な偉容を誇っていた」のか分らなくなってしまいました。
　ところがそれから数ヶ月後、裸だった畑に緑が広がり始め、あっという間に成長していきました。
「今度は何が生えてくるのだろう？」
何か謎めいていて、だんだんこの道を自転車で通り過ぎるのが面白くなってきました。
　そして初冬にさしかかろうとしたある日、その畑は再び黄色く染まりました。又々一夜にして。
冬のひまわり畑だったのです。
「ひまわりって夏だけじゃないんだ。冬にも咲くんだ。そんな事ってあるんだ」
大変な驚きでした。
「あり得ないことがあり得る事も世の中にはあるんだ」
そう思うと、訳も分らず、なんだか、急にうれしくなってしまいました。
コロナで、冬で、風前の灯火の自分たち。
それでも「あり得ないことだってあるんだ」
というこの冬のひまわりは、いろんな物を示唆してくれる大切な宝物のように思われました。
　自分は自転車を降りて、お店の準備が遅れるのも忘れ、無我夢中でいろんな角度から冬のひまわり畑をスマホでとり続けました。

（完）

（著者プロフィール）

うときゅう いっき

本名 宇都宮一貴（うつのみや かずたか）

一九五三年東京生まれ。早稲田大学第一文学部ロシア文学科を二回留年の後、卒業。大手電機メーカー商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。四十歳から五十二歳まで十二年間重度うつ病を罹患。左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊の後、生還。定年退職後、嘱託社員契約を辞して株式会社うとQを設立。趣味は観察すること、考えること、書くこと、カメラの四つのｋ。著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名に由来する。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき　となります。漢字にするとかなり御大層な名前に見えますので、敢えて音読みひらがな表記にしております。

ホームページ：http://utokyu.co.jp

（出版情報）

著　者 うときゅう いっき

発行人 宇都宮一貴

発行所：株式会社うとQ

〒二一五‐〇〇一八

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東５丁目３４番７号

電話：〇四四‐九八九‐一六九八

発　売 株式会社 うとQ

編　輯 ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）

カバーデザイン＆DTP 製作 ナレッジフォレスト（大竹鉄哉）

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020

発行日：二〇二〇年十二月三十一日　初版発行

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、
複製することは禁じられています。

（その他著書）

「人生終わったなと思った時に読む本」（二〇一五年刊 ソフトカバー在庫僅少）

「人生終わったな」と思う間もなくトンネルの闇を抜けて広野原（二〇二〇年刊 amazon

kindle）
「コロナ禍 同時進行執筆 ナマステ別館堂主人「ニューノーマル探索サバイバル日記」二〇二〇年壱月の巻〜十二月の巻」（二〇二〇年刊 amazon kindle）
（初本）カリー屋ナマステ別館堂主人 掌編小説集「冬のひまわり」（二〇二〇年刊 amazon kindle）